

追悼 毛利 忍先生を偲んで

毛利 忍先生の軌跡



石井則久●国立療養所多磨全生園（東京都東村山市）

友田（毛利）忍先生は会津藩に祖を求められ、神奈川県立平沼高校（県立第一高女）を卒業、現役で横浜市立大学医学部に入学し、昭和47（1972）年3月に卒業しました。学生時代から第2生理学教室（川上正澄教授）に出入りし、毛利元彦先生（44卒）に見初められました。会津藩と長州藩の結婚は波乱に富むものでした。

横浜市大で研修を始めましたが、昭和47年は初代・野口義圀教授が新病院の非常階段問題で職を辞した時で、皮膚科研修は混乱したようで、入局は永井隆吉教授の下でした。元彦先生が金沢に招聘され、それに付いていく格好で、忍先生も北国へと流れていきました。野口先生の東大同級生の金沢大学・福代良一教授の門下に入り、医真菌をメインテーマに診療と研究を重ねました。

元彦先生の神奈川への帰還に従って、金沢大学の関連病院の大船共済（栄共済）病院に戻ってきました。横浜市民病院・加藤安彦先生の病院長就任に伴い、臨床、病理、手術、指導力、そして酒力の全てに秀でた忍先生が後任部長として君臨しました。加藤先生の実力に勝るとも劣ることは無く、忍力を発

揮しました。大学として嬉しかったことは、若手皮膚科医を鍛えてくれたことです。多くの若手が市民病院での研鑽を希望したことはその表れで、彼ら彼女らは横浜、神奈川、全国で患者さんに慕われています。

実力と人望、そして美味しい酒の嗜みで、横浜市、神奈川県、日本の皮膚科医会で活躍し、ようやく表舞台に出だした女医の中でも際立った指導力でした。「桃李もの言わざれども下自ずから蹊^{みち}を成す」多くの仲間、後輩が集いました。

日ノ出町駅を出て左にあった居酒屋「だるま」、狸の徳利が可愛く、親父が忍先生の患者で、第2生理の行きつけ（昔の話だが）、美味しかったですね。エスカイヤクラブでも臆することなく、バニーガールを冷静な目で見ていましたね。加藤安彦邸での「梅酒の会」では気が置けない仲間が集まり、加藤實枝子様の手挽ぎ自家製梅酒、至福でした。毛利邸での「梅酒の会」では忍先生の手作りの料理に舌鼓を打ちながら、酔いしれました。

もう忍先生と飲めなくなり、一人酒の毎日です。さようなら。

毛利 忍先生を偲んで



山川有子●山川皮膚科（横浜市神奈川区）

毛利忍先生が部長としてご活躍されていた横浜市民病院は、当時若かった私たちにとって「働きたい病院」の人気No.1でした。私は大学院卒業後の1994年から2年間、横浜市民病院に勤務させていただきました。

病院の宿命なのですが、年度初め、検査も診断も危ういような若い医師がやってきます。私が赴任した後、戦力ダウンした皮膚科チームを抱える毛利先生には、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。それでも何とかお力になれるよう、奮起したのが昨日のこのようです。

毛利先生は、患者さんのためを一番に考え、患者さんをととても大切にされていらっしゃいましたので、毛利先生の信者のような患者さんが多数いらっしゃいました。診察室で何を語られているか、こっそり聞いてそのマジックを盗み聞きしようと思うのですが、声がとてもお小さいのでよく聞き取れません。それでも「患者さんが何を考え、何を希望しているのか」をよく理解し、その希望をかなえられるように努められる姿勢は、自然と私達にも引き継がれていきました。「患者さんは長い時間を待って、裸にまでなって皮膚を見せて、最後はお礼を言ってお金まで払っていくのだから、患者さんを大切にするように」とおっしゃられていたのが、今も私の患者さんに対するモットー「患者さんのために」の基礎になっています。

毛利先生はどのような皮膚科疾患でも全般的にお詳しくあったのですが、特に二つの分野がお得意でした。その一つが病理組織です。市民病院に配属された直後は、病理組織どころか皮膚の正常組織すら理解していなかった私は、毎週水曜日の診療後から始まる病理組織カンファレンスで先生方の足をひっぱってしまい、一向に先に進みませんでした。症例ごとの検討がすべて終わって帰宅するのは終電ぎりぎり。まだ若かった私たちでも疲れましたので、毛利先生はどれほどお疲れになっていたことか。今でも思い出すと申し訳なかったと思う次第です。



毛利先生還暦のお祝い

もう一つの得意分野は手術です。毛利先生は手先が非常にご器用で、細かい手術をととても丁寧に素早くこなされましたので、私たちの憧れの的でした。不器用でもたまたした若い医師の手術を指導して下さっていましたが、今更ながら非常に辛抱されていたらうと思います。

毛利先生は皮膚科だけではなく、医師として医学全般にお詳しくあったのも、いかに優秀な医師であったかを物語ります。さらには、医学だけでなく、文学、美術、音楽など、あらゆることに造詣が深く、どの分野をとってもスペシャリストといっても過言ではありませんでした。とくに読書がお好きで、時間が空くと常に読書されていましたが、私たちの心配をよそに、歩きスマホならぬ歩き読書されていたことは、非常に有名なお話です。

またお料理も得意で、毛利先生のお宅にお招きいただくと、ご自慢のローストビーフをはじめとした豪華なお料理が、テーブルに並びきれないほど並んでいたことが、懐かしく思い出されます。

毛利先生が市民病院を退職されたあと、私のクリニックに火曜日午後、診察に来てくださいました。診断がわからない患者さんには、「火曜日午後受診してください」とお願いし、ご高診いただいたことを心から感謝しております。真菌の患者さん、爪などの難治性疾患、色素性母斑などの腫瘍の診断、手術後検体の病理診断など、さまざまな疾患をご高診



毛利先生70歳のお誕生会（古希のお祝い）

いただきました。いまだに、もし毛利先生ならどう診断されるだろう、と思うことが多々あります。また、毎年、クリスマスの時期が近づくと、何本もパウンドケーキを焼いてスタッフにもプレゼントしていただきました。

現在、私共が受け継がせていただいている Joy Derma Club (JDC) は、2005年、毛利先生を委員長として発足しました。毛利先生のお力でJDCは1年に2度、充実した講演会を開催することができ、多くの女医さんが楽しみに参加してくださる大きな

委員会に発展していきました。

2019年2月17日、毛利先生の訃報に誰もが驚き、悲しみにくれました。クリニックでは、毛利先生の患者さんにこの悲報を伝え、多くの患者さんに泣かれました。こちらにも一緒に泣きたい気持ちでいっぱいでした。

いつも毛利先生にはいろいろな事を教えていただきました。恥ずかしいことながら、私は日本語すら、よく直されていたのです。

この毛利先生への思いを詰めた追悼文をご覧になられたら、なんとおっしゃられるのだろう？ と思いながら、筆を擱きます。

毛利先生、本当に非常にいろいろなたくさんの方の事を教えていただき、どうもありがとうございました。これからも、毛利先生の教えを胸に、患者さんを大切に、精進したいと強く思っています。先生の遺志は、毛利先生に教えを乞うた、多くの後輩医師が必ずや受け継ぐことと思います。

